鶴見俊輔、小田実が語る「9・11と9条」その① 市民の意見30・関西の9・11集会より

「お前は間違っている！」と断言する誤り

――原爆についての答えを出すこと、『風土記』を手がかりにすることなど――

鶴見俊輔

「市民の意見30・関西」（代表＝小田実さん）は、9月11日、大阪で「鶴見俊輔さん、小田実さん、2人が語る『9・11と9条』」という集会を開きました。関西各地から130人が参加し、とてもいい集会になりました。そこでのお2人の話の要旨を、「市民の意見30・関西」の記録にもとづいて、本誌では今号と次号の2回に分けてご紹介します。小田さんのお話は、12月号に掲載予定です。

9月11日の会では、冒頭で、小田実さんがこの集会の趣旨をこう語りました。

「5年前の9月11日の事件をきっかけに、世界は大きく変わった。アメリカは、そして日本もそうだが、民主主義というものが目茶目茶になっている。そういう5年間を生きてきて考えたことを、鶴見さんと私とでお話し、どうしたらいいのかを一緒に考えたい。まず、鶴見さんから。……」

◆自分が最も頼りない状態にあった時◆

『赤旗』の記事ですが、86歳の大串静雄さんが、戦友会に出て、自分たちが中国でやった中国人刺殺のことを話題にしたそうです。途端に座が白けてみな黙りこくってしまった。それで、もうこのことは言うまい、と思ったというのです。家庭でも話せず、長く続いている戦友会でも話題にできない問題があって、黙ってしまう。その黙った上に、今の新しい政治が出てきているのです。

私は自叙伝というものを書くまいと決心している。でも、それに近いことは発言する必要があると思う。自分が最も頼りない状態にあったときのことを話し、そこから9・11のことに入ってゆきたい。

私は、戦争中、海軍軍属を志願して、ジャワにいた。1943年のある日、私と同室の男が、ポルトガル領ゴア出身の黒人捕虜を殺すよう命令された。彼はその捕虜を墓地に掘ってある穴まで連れて行って殺し、土をかけて埋めさせられた。帰ってきて、彼はとても嫌な仕事だったと言いました。

その命令がなぜ彼に来て、私には来なかったのか。偶然ですね。それをどう考えるか。たまたま彼に命令が来て、私は手を汚さずに済んだ、よかったじゃないか、それで終わりにはできない。哲学だったら、自分にその命令が下ったらどうするだろうかを考えるのです。命令が私にきたら、拒絶しただろうとは思う。しかし実際に拒絶しているわけではないの

だ！」とね。「この野郎！こいつイェール（アメリカの名門大学）を出てるって言うが、イェールの西洋史でいったい何を学んだんだ！」と思ったね。彼の英語は、イェール出の上流階級の英語だ。だけど、この男の成績は千人中700番だ。900番だったら卒業できませんから…。（笑い）これが私の直感です。

十字軍というのは、惨憺たる汚い歴史ですよ。イェールの教授は、ちゃんと教えてるはずなんです。ブッシュはアメリカ二百年の歴史の中で、下から2番目にできの悪い大統領だ。最悪はハーディング（第29代大統領、1921－1923在任）で、酒を飲む以外何もしなかった。その前のウィルソンは理屈が長い大統領で、国民はウンザリし、そんなんじゃない人間を次に選びたかった。それでダメなハーディングを選んだんです。アメリカ人というのは、そういうことをするんですよ。

◆クリスチャンにならなかったこと◆

私はブッシュの話を聞いていて、あ、八十余年の人生でクリスチャンにならなくてよかった、と自分を祝福したね。ブッシュのような困ったクリスチャンはたくさんいるんです。その特徴は、相手が誰だかも知らないのに、"You are wrong."（お前は間違っている）とすぐ言うことだ。その前に"What are you?"（あなたはどんな人ですか）と尋ねないし、そのまえに"What am I?"（私とはどんな人間なのか）とも問わない。新約聖書を読んでみてください。イエスは「私は救世主だ」などとは言いません。"What am I? What are you?"と言っています。クリスチャン、笠原芳光さんによると、イエスは「ブッダ」だということです。「ブッダ」とは道を求める人ということです。笠原さんに賛成です。"You are wrong."としか言わない今のキリスト教に入るつもりはない。

キリスト教徒に面白い人はいますよ。知人では物理学者の渡辺慧さんです。彼は生まれたときからクリスチャンでした。聖公会での名前はマイケルでした。岩波がやった講演会で、渡辺さんはこう演説したんです。「キリスト教は、自分が考えるように考えろ、と人に押付ける宗教だからどうしても戦争から自由ではなく、よくないですね。ところが、仏教は死んだ状態が理想だと言うのですから、これはいい宗教です。キリスト教は仏教から学ぶところがなければならない」と。

私はこれこそ本当のエキュメニカルな（世界教会主義の）場所だと思う。それまでのエキュメニカルでは世界の宗教の中でいかにキリスト教が卓越しているか、ということしか言ってこなかった。つまり、"You are wrong."ですよ。しかしクリスチャンの渡辺さんは、それを批判する場所としてこの講演会を活かしたのです。

◆小田実の光景と米大統領の光景◆

話題を変え、小田実と米国大統領というテーマにします。小田実は、14歳で経験した大阪大空襲の光景が目に焼きついている。後、フルブライトでアメリカに留学し、戦争中の古い『ニューヨーク・タイムズ』で大阪大空襲の写真を見た。これは戦争時の大統領トルーマンが見た光景だ。日本からのふつうのフルブライト留学生だったら、そこで自分の眼底にあった写真を、米国大統領の見た写真に差し替えてしまうんです。つまり、アメリカ人の視点になってしまうんですね。

ほかの国からのフルブライト生だったら、たとえば『オリエンタリズム』を書いたE・W・サイードもそうだが、独自の見方をもってアメリカ人に大きな影響を与えた。だが、それにかなうような仕事をした日本人留学生はいませんね。しかし小田実は、自分の眼底にあった大阪大空襲の光景を、トルーマンが当時目にした写真の光景に差し替えなかった（注1）。そこが他の日本人フルブライト生との大きな違いだ。変えない。それが小田実の力なんです。べ平連の力もそれなんです。

小田さんがそこにいるからお世辞を言ってるんじゃありませんよ（笑い）。

だから、「しただろう」だけでは済まない。

私は戦争が始まってから交換船で帰国するんですが、日本への帰国は恐ろしかった。日本の敗戦は確実だと思っていた。日本のやっていることは間違いだとも思っていた。海軍で私がやらされた仕事は、敵の発表の通りの新聞を作れということだった。海軍は大本営発表などまったく信じていなかった。そんなものを信じていたら、沈んだはずの敵艦がつぎつぎ登場してきて、作戦など目茶目茶になってしまう。だから、的確な判断をするには、相手方の情報を頼りにせざるを得ない。毎晩、アメリカ、イギリス、インド、重慶の放送を聞いてメモを取り、翌朝、それを日本語の新聞にしたんですね。私は字が下手ですが、タイピストが2人ついていて、片端から私の原稿を活字にしてゆくんです。

私は当時、「Diagnostic Documents」（私の診断書）というノートをつけ、袋に隠していた。小田さんは最近『玉砕』という本を出されましたが、私はその自分のノートに、アッツ、マキン、タラワと続く玉砕がいつジャワに来るか、その時どれほどの日本人が玉砕を免れるか、自分がその中に入る可能性はあるか、などの計算をして書き込んでいた。見つかったら大変だが、「ダイアグノースティック・ドキュメンツ」なんていう英語のわかるものは海軍にいなかったんですね。

日本が勝つわけはない、必ず負ける、そんなことを考えていたのは私1人だけでした。私は、内面では、英語で考え、語っていた。それは恐ろしい毎日でした。私に直接、捕虜殺害の命令が来たとき、それは人道に反するとして拒否できるだろうか、恐ろしさに負けて、命令に従うことはないだろうか、そうなったら、永遠に苦しみ続けたことだろう。

◆「私は人を殺した、それは悪い」◆

日本は私の考えていた通り、負けた。ただし、私の予測よりずっと後だった。思ったより日本は強かった。戦争が終わり、時間が経てば、私は捕虜を殺した、と言っても罰せられない時も来た。1952年（講和成立、日本の独立）以降ならそうですね。そのとき、「私は人を殺した、殺すことは悪い」と一息で言えるような人間になりたい、そう考えた。それは戦後、今日まで続いている思いだ。

その間に一拍を置かないで言いたい。こんなことを言うのはつい最近なくなった私の姉（鶴見和子）の和歌の影響です。彼女は佐々木信綱に歌を習った。和歌では、腰折れというのはいけないのです。五七五七七の第三句と第四句の前と後ろでなんとなく捻じ曲がって繋がらないことですね。

私は人生の理想、道徳的目的を、地面すれすれの低いところに置いている。高い目標など持たない。「私は人を殺した、殺すことは悪い」と一息で言えるようになる、私の最高の人生の目標がそれなのです。私は小さいときから母に「お前は悪い子だ」と言われ続けた悪人です。途中で善人に変わって声なき声の会やベ平連に加わったのではない。悪人としての人生を続けてそういう活動もしたのです。心を入れ替えて、今から正義の行動をし、「9条の会」を始めるんだ、そんな偽善者のようなことは決して言わない。

◆5年前9・11のTVを見た時◆

9・11の話に進みます。5年前のあの日、偶然つけたテレビで、アメリカの大統領が話してる。英語です。それを私が聞いている。ジャカルタ在住海軍武官府で、私1人だけがアメリカの放送を聞いているのと似ていた。さて、そこで大統領はこう言った。

"We are crusaders."「われわれは十字軍

という評価をするのです。京大数学科というのは何者かですね。つまり、結果の答えは間違っていても、それに至る途中の推理などが優れている場合は、それを評価して点を与えるのです。シュレジンガーも、日米開戦の見通しという結果では誤っていたが、しかし、彼の言ったことに途中点を与えるべきだと思った。

◆優れたエリートを生み出す民衆の力◆

幕末、明治維新をつくる力の中で、坂本竜馬、高杉晋作が生まれるが、坂本を押し出す上役、後藤象二郎がおり、高杉を押し出す周布（すふ）政之助がいた。確かにその時代、そこにはうねりがあった。そのグループの中からは、家禄の低いところから奇兵隊に入り、軍人になった児玉源太郎（1852～1906、日露戦争時の満州軍総参謀長）も出てきた。

児玉は、日露戦争の前、京都の山縣有朋の屋敷で開かれた会議に出ていた。首相の桂太郎、伊藤博文もいた。そこで児玉は日露戦争をやれるかどうか問われた。彼は、やりましょう、しかし、1つ条件がある、それは、自分がここでやめ、と言ったら、どんな不利な条件をロシヤが出してこようとも、それをのんで戦争を止めるという約束をしてくれればだ、と言った。それは認められた。

児玉源太郎は、19世紀から20世紀の中で、最も優れた判断力を持つ頭のいい軍人だった。彼以前では、ナポレオンがロシヤと戦って負けた。彼以後ではヒトラーがロシヤと戦って負けた。だが、児玉だけは負けなかった。世界史の中には、優れた判断力を持った人物というのはいたのですね。

日本の民衆は、決して悪い構造の頭の集団ではなかった。幕末の日本民衆は、そういう優れたエリートを送り出す力を持っていたではないですか。それは民衆の力なんです。その限りでは、シュレジンガーには「途中点」を出すべきだと思った。だが、その見通しは最後に誤った。日本の近代史を勉強していなかったからだ。途中点の切れ目はどこか。日露戦争の終わりの時だ。児玉が偉かったから、あそこで止まったが、もっと続けていたら、日本は負けましたよ。国土を全部占領されたかもしれない。

日本の戦死者は多かったから、戦後、この国の指導者は、日露戦争が大勝利だったという大宣伝を始めた。宣伝しているうちに、本当に大勝利だった、日本は強いんだと、自分も思い込んでしまうようになるんだね。そこからです、この国がどんどん悪くなるのは。

そして、日本は世界の5大強国に入った、いや3大強国になった、アメリカと覇を争えるようになった……と、その線で進んでしまう。しかし虚心に考えてごらんなさい。アメリカから屑鉄を買って軍艦を作ったりしてる国が、アメリカと戦って勝てるわけがない。小さな子どもでもわかるような計算が出来なくなってゆく。権力とは、それほど人間を馬鹿にさせるんです。

あれだけひどい目にあいながら、まだ今でも、国会では、馬鹿が集まって馬鹿な計算を続けてるじゃないですか。アメリカの政治家と並んで写真をとって、喜色満面、馬鹿の定義ぴったりとしか言いようがない。私はシュレジンガーの途中点のことから考えて、日本は大変なことになったと思っています。

◆まだ出ていない原爆経験への答え◆

話題をまた変えます。原爆経験のことです。世界の中で、実戦で2度も核兵器を投下された日本として、この問題への姿勢は明らかにしなければならない。だが、それから61年も経っているのに、まだこの国は答えを出していない！　変じゃないですか！

アメリカは、上空からの詳しい写真で、日本の軍需工場がほとんど壊滅し、戦闘継続能力がなくなっていることを十分理解していた。その上に原爆を2度も投下すべきなのか。当時、大統領直属の参謀長、リーハイムはノーと言った。だが、それ

◆日米開戦に関する見通し◆

また話題を変えます。江戸時代からある「貼り雑ぜ」調をまねして、いろいろなテーマを切り替えて続けます。

1941年秋。マサチューセッツ州ケンブリッジという町に私はいた。そこで3人で会議をしたことがある。それは、日本大使館の若杉要公使から万年筆で直筆の書簡が来て、最後の引揚げ船に乗って帰国せよとのことだった。私は身元保証人だったシュレジンガー（アーサー・Jr.）のところに相談に行った。そこには先客、都留重人さんがいた。彼のところにも、若杉公使から同じ手紙が来ていたのです。3人で相談し、公使の話は断ることにした。でも、理由はそれぞれ違っていた。シュレジンガーも都留さんも、日米間で戦争にはならないという意見だった。私はなると思っていた。（注2）

シュレジンガーの判断には根拠があった。彼はこう言ったのです。自分はアメリカ史の研究者で日本史のことは知らない、しかし、アメリカ史と日本史とが交錯する機会があった、1853年、米国艦隊の黒船訪問の時だ、日本側は情報がなく、将軍をはじめ各大名はうろたえるだけだった。だが僅か10年の後には、日本は民衆の中から優れた指導者を続出させ、そして30年の間に、ヨーロッパ列強と並ぶ判断力を持つ国家をつくった。こういうエリートを生み出す能力を持った民族が、今、負けるに決まっている戦争に踏み切るとは到底思えない、それが彼の判断だったのです。

都留さんは私のただ1人の先生と言える人で、頭の悪い人では決してない。だけど、このときは間違った。頭のいい人は、大臣なんてのも、自分ぐらいの判断力はあるだろうと思ってしまうんですね。東条（英機、時の首相）はそんな判断力をもっていなかったんだ。でも私は、父をはじめ、政治家という者を身近に知っていたから、政治家には頭のいい者はほとんどおらず、とても信用できないと子どもの頃から思っていた。だから私は、若杉公使も、野村（吉三郎）大使も、来栖（三郎）大使も、みな騙されているんだと思いましたね。開戦という軍の最高機密を外務省の役人などに知らせるはずがない。そして事実その通りだった。（注3）

その帰国勧誘に応じた留学生は多くいた。学籍を抜き、東海岸から西海岸まで大陸を横断して船の到着を待ったんです。でも船は来ませんでした。船長は、出航時に封をした文書を渡され、出航から幾日後に開封せよという命令を受けていた。そして開けてみると、直ちに帰国せよ、と書いてある。つまり、日米開戦はすでに決まっており、船の帰国途中で実際に戦争が始まったのです。船に乗ろうと西海岸までかなりの旅費を使って集まった留学生たちは悲惨でしたよ。学籍さえ抜いてしまっているから、戻るところがない。1人の学生は私の屋根裏部屋の宿舎に居候のように転がり込んできました。ピストルを持った男3人がその屋根裏部屋に来て、私を逮捕していったのはその後のことです。

◆シュレジンガーに与える「途中点」◆

その後、日米交換船が出ることになり、私はそれに乗って帰国するかどうか尋ねられた。乗らないという選択もあった。そうすれば、監獄にいて、結構うまい料理を食って、そして死なずにすむ。監獄のコックはイタリア人でしたよ。帰国すれば、敗戦確実の国の中で死ぬ可能性は大きい。でも私は帰国を選んだ。負ける国の中で死者はたくさん出るだろう、私はその機会を平等に持ちたい、そう願ったんですね。交換船に乗ったら、都留さんも、姉の和子も乗っていた。

帰国には2カ月半かかったが、その間、いろいろゆっくりと考えた。シュレジンガーの言ったことははずれたわけだが、私は彼の判断に「途中点」を出すことを考えた。普通、試験の成績は最後の答えがあっているかどうかだけで決められます。だが、京大の数学科だけは、「途中点」

を押し切って大統領は投下を命じた。なぜですか。まだ原爆を持っていないソ連に見せつけたい、もう1つ、原爆開発に議会の了承を得て膨大な予算を使った手前、それが有効であったことを示したい、それだけじゃないですか。正義のためでも何でもない！　だが、そのことを大統領が米国民に明らかにしたことは、この61年間1度もない。日本が明らかにすべきでしょ。日本は民主主義で、言論は自由だと言いながら、61年間、その問題への答えを出していない。

答えはあるのか。あります。国家主権の問題です。State Sovereignty――国家主権とは、原爆などなかった19世紀に出て来た概念です。それへの考え直しから始めなければなりません。

◆『風土記』を手がかりとして◆

おぼろげながらだが、手がかりがある。私たちは、古事記でも日本書紀でもない『風土記』という古典をもってるじゃないですか。（注4）あれには地理だけが出ていて、国家だの国家主権など一切出てこない。その中には浦島太郎のような英雄の物語も出てくる。浦島は実に偉い人間だ。動物愛護でしょ。

浦島に匹敵する人は今もいるとは思う。ペシャワール会の中村哲さん（注5）などそれだ。最初はハンセン病治療に行ったのだが、のち、水を掘る仕事を始める。もう1人挙げれば、被害者なのに警察とマスコミに犯人扱いされた松本サリン事件の河野義行さんです。お連れ合いはまだ寝たきりです。だが、オウムに破防法を適用すべきかと聞かれたとき、彼はノーと断言した。それは悪例をつくることになると。

こういう偉い人が、1億2千万人の中にはいるんだよね。そのことを念頭に置き、そして『風土記』を一つのわれわれの古典として活かす――そういう道をこれから歩くということは、可能性としてはある。しかし、61年、われわれはそれをやってこなかった。われわれの祖先は1853年（ペリーの浦賀来航）以後、僅かの間に見事なエリートを多く生み出したが、今、それとはまったく違った指導者を抱えてしまっている。議会に東大出はいるが、エリートなどでは決してない。東大は馬鹿の矯正機関などではないのだ。さて、どうする。

以上が今日の私の話です。憲法と「9条の会」については、直接述べなかったが、ここでは、憲法の改変に反対し、「9条の会」の呼びかけ人として加わるに至った自分のそれまでの生き方を語り、その前提のような考え方をお話したかったのです。（拍手）

（つるみ・しゅんすけ　哲学者、「9条の会」呼びかけ人）

（要約まとめ・文責＝吉川勇一）

（編集部注） 本文の中の（括弧）内の記述も編集部が適宜つけたもの。

1 この話は、小田実の最近著『玉砕』（ドナルド・キーン、ティナ・ペブラー共著、岩波書店、2835円税込）の序文でも述べられている。

2 このときの話は、鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創『日米交換船』（新潮社2006年、2400円＋税）の36～46、294～295ページで詳しく述べられている。

3 この前後の事情は、前掲書37～39ページに詳しい。

4 本誌前号の鶴見さんへのインタビューにもこの話は出てきて、読者から本の問い合わせがあった。『風土記』は『風土記逸聞』と合わせて、平凡社の東洋文庫145の『風土記』（吉野裕訳、2400円＋税）に、現代語訳で収められている。

なお、同じ前号のインタビューに出てきたインドの『バガヴァッド・ギーター』についても問い合わせがあった。これは、岩波文庫から上村勝彦訳で出版されている（600円＋税）。どちらも現役の本で入手可能。

5 ペシャワール会は中村医師のパキスタンでの医療活動支援のため、84年より現地活動を開始、現在年間約16万人の患者診療を行ない、加えて00年夏よりアフガニスタンの村々で約千ヵ所以上の水源確保作業を継続している。

（つづく）